

特別支援教育実践マニュアル

<No.3>

～ADHD(傾向)のある子へのサポート特集号～

特別支援教育実践マニュアル<No3>をお届けします。

人は、置かれた状況に対し、自分なりのやり方で対処しようとしています。発達障がい(発達の偏り・遅れ)のある子も然りで、その子なりの対処行動をとります。しかし、その対処行動は往々にして不適切なものになりがちです。

このマニュアルでは、発達障がいのある子の示す「問題行動(気がかりな行動)」を、「その子なりに適応しようとして試みた不適切な行動」として理解し、支援の具体的な手立てを提案します。なお、ここに挙げる支援の手立てはどれも、発達障がいのない子にも有効です。

本市では、特別支援教育の重要なツールとして、「個別の指導計画」の活用を奨励しております。その活用については、子どもとの1対1の関係を大切にしつつ、学級経営の中に組み込むことが重要となります。本マニュアルがその一助となれば幸いです。

こんなタイプの子、クラスに何人かいませんか？

- 事例8 授業中に余計なことばかりして、気ままに教室を出ようとする。
- 事例9 事実を誤認したり脚色したりして、トラブルの原因をつくる。
- 事例10 テンポが遅く、授業中もボーッとしていることが多い。

「落ち着きがなく、不注意で、衝動的」になる理由…それは

ADHD(傾向)のある子は、どうして「落ち着きがなく、不注意で、衝動的」なのでしょう。それは彼(彼女)らが、“したいこと”を一時的(瞬時的)にでも保留することが苦手だからです。保留することが苦手だと、学校などの集団場面では、さまざまな不適応行動を起こしやすくなります。

保留するのが苦手なので…

① 自分の姿が見えにくい

ADHD(傾向)のある子は、“したいこと”を一時的(瞬時的)にでも保留するのが苦手なので、気持ちが外側にばかり向かいます。その結果、自分の姿が見えにくくなります。自分の言動をモニターすることが難しいのです。モニターが難しいと、ちょうど、イヤホンで音楽を聴きながら人に話しかけようとして自然と声が大きくなってしまいうように、行動の調整が難しくなります。このように、自分の行動が見えにくく、調整するのが難しいと、しゃべり過ぎたり、やり過ぎたりしてしまいます。人のじゃまばかりして楽しんでしまうことや、暴言や暴力へとエスカレートしてしまうこともあります。

保留するのが苦手なので…

② 結果をすぐに求めてしまう

意見や態度を保留するのが苦手だということは、何かにつけてすぐに結果を求めてしまうということでもあります。すぐに「解らない!」とか「解った!」と結論を出してしまい、ケアレスミスも多くなります。結果が見えないとすぐにイライラし始めます。また、友だちと競り合って負けそうになると態度を急変させ、ふてくされたりもします。満足を後回しにできず、あわただしいとか、堪え性がないという印象を与えるかも知れません。結果を追い求めるあまり、強い刺激や危険なことを好み、無茶な行動に出る子もいます。

保留するのが苦手なので…

③ わき道に逸れて戻って来ない

授業中、子どもはちょっとした活動の合間に気持ちを逸らします。例えば黒板の字を写し終えた、問題を1問解き終えた、先生の説明がひと段落した、など。そして、消しゴムをいじったり、隣の子にちょっかいを出したり、窓の外を眺めたりします。このとき、たいていの子どもはメインの活動(授業の流れ)に向けていた意識を保留しているので、いったん外した気持ちを再びメインの活動に向けることができます。ところが、メインの活動に向けていた意識を保留しておくことが難しい彼(彼女)らの場合、いったん外した気持ちはどんどん外れて行ってしまいます。こうして不注意が常態化し、おふざけが高じていきます。

保留するのが苦手なので…

④ おおよその見当をつけるのが難しい

学習面では、問題文の概略を一時的に記憶しておくことが苦手なので、説明を受けても問題文と対応させて聞くことができず、理解がなかなか進みません。短期記憶の容量が少ないので、冗長な説明を理解するのが難しいのです。思考を整理し、大意をつかんで問題を解くことも苦手です。日常では、優先順位をつけて行動することが難しいようです。身の回りが散らかったままになったり、身じたくが間に合わなくなったりすることが頻発するのも、こうした理由によるものです。

ADHD(傾向)のある子への支援の手立て

ここが支援の
ポイント!

ADHD(傾向)のある子の不適応行動は、集団の規律を乱す場合が多々あります。そして、分かっているのにやらない、何度言ってもやり過ぎてしまうといった態度は、本人の気持ち次第のようにも思えてしまいます。彼(彼女)らの不適応行動の背景には前記①～④のような、本人にはコントロールの難しい問題がある、ということ意識して支援しましょう。

事例8 授業中に余計なことばかりして、気ままに教室から出ようとする。

Hさんは、授業中いつも目立とうと、ふざけたことばかりしています。ちょっとした活動の間には、すぐに手持ち無沙汰になって余計なことをします。隣の子にちょっかいを出して嫌われると、なおさら強引に関わろうとし、余計に避けられると、次には怒りが爆発してしまいます。また、ときには気ままに教室を出て行こうとさえします。さて…

Hさんへのサポートの方法



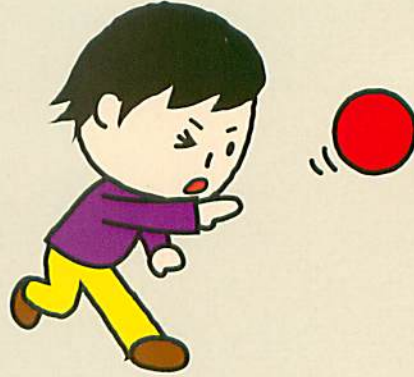
- **身体接触**:できるだけHさんの体に触れて声かけをあげます。ちょっとした身体接触が、ひまつぶしを始めた子どもの意識水準をほどよく調整します。机間指導を効果的に利用しましょう。
- **再枠づけ**:教室から出たくなったら、あらかじめ渡しておいた『いってきますチケット』を担当に提出させて許可します。非社会的な行為も、決められた形で承認されることで社会性を帯びてきます。
- **見通しという枠**:「みんな聞く準備はいい?最後まで聞いてから答えてね。では問題」などとリードします。すぐ発言したがるHさんには、「3番目に答えてもらうからね」と枠を作ってあげます。
- **タイムアウト**:泣いたり怒ったりといった興奮状態が続いている間は、言い聞かせなどの刺激は避け、場所を変えて気持ちが鎮まるのを待ちます。
- **集団帰属**:補助教員がいる場合でも、活動の促進・抑制は主に担任がおこないます。Hさんが「担任の先生は他のみんなの先生で、ほく(わたし)の先生じゃない」という意識にならないようにします。
- **代替案の提示**:してはいけない行動を分からせようとするのではなく、代わりにしても良い行動を具体的に教えます。その際、みんなの前で叱るというのは、最も避けたい対処です。
- **うまくいったシナリオ**:どんな些細な場面でも、穏やかな気持ちで友だちに働きかけている場面をみつけてほめます。子どもが良い自己イメージに沿って行動できるよう支援します。
- **他の子の満足度**:「Hさんだけどうして?ズルくない?」などと訴えてくる子には、「あなたも頑張ってること、先生は知ってるよ」と認めてあげます。Hさんの説明は二の次にしましょう。

事実を誤認したり脚色したりして、トラブルの原因をつくる。

Jさんは、ドッジボールのボールが当たっても「当たってない!」と誤認し、主張し続けます。また、サービス精神が旺盛で、脚色したウソの報告をしてしまうこともたびたびです。事が大きくなっても、その深刻さが伝わりません。さて…

Jさんへのサポートの方法

- **問い詰めない**: 事実関係を明らかにするといい、問い詰めるような対応は避けます。Jさんは空間的にも時間的にも視野が狭く、ただ事実を誤認しているだけなのかも知れません。
- **自己決定感**: 子どもがつくウソの多くは、日常全般で“やらされている感”が強すぎるサインです。宿題や掃除の範囲など、自分で責任をもつてできる範囲を決めさせ、承認し、励まします。
- **感心**: ADHD(傾向)のある子は発想が豊かです。大人の価値観からすれば、たわいない着想に対し、意図的に「なるほど!」「へえ～」と感心して、自己肯定感を高めてあげましょう。



テンポが遅く、授業中もボーッとしていることが多い。

Kさんは、授業中もボーッとしていることが多く、説明を聞き逃すことがしょっちゅうです。テンポが遅く、友だちとの遊びにも乗り遅れてしまいがちです。そんなKさんは、プリント学習でも特に文章問題が苦手です。さて…

Kさんへのサポートの方法

- **ヘルプカード**: 子どもの気持ちを惹きつける魅力ある授業は、Kさんにとってはテンポが速すぎるかも知れません。授業中、先生の話聞きそびれて困っているときも、授業で使う教材を家に忘れてきて困っているときも、困ったふうな態度をとらず、そのままほんやりしていることがあります。Kさんには、ヘルプカードを作って渡しておき、「何をしたら良いかわからないとき」「忘れ物をしたとき」「探し物が見つからないとき」には、ヘルプカードを頭の上に掲げるよう約束しておくのが良いでしょう。
- **問題文の把握練習**: Kさんは問題文を一時的な記憶にとどめていない可能性があります。問題文を記憶にとどめる意識をつくるためにも、問題文を読んだ直後にその概略が把握できるよう、暗唱してから問題を解く練習を促しましょう。

「ADHD(傾向)」といっても、その発達障がい程度は子どもによりさまざまです。ここに挙げた手立てについては、子どもの発達段階に合わせて工夫する際の参考例として活用してください。“ちょっとした工夫”…それが特別支援です。